

都城市議会議長 様

提出日 令和5年6月14日

## 研 修 報 告 書

以下のとおり研修の報告をいたします。

### 1 会派名及び受講者名

青雲 川内賢幸

### 2 視察先・テーマ及び日

◎5月25日(木)・5月26日(金) 全国若手議員の会研修

場所：福岡県福津市 海のほとり玉井 及び 津屋崎千軒

内容：5月25日

「津屋崎スタイルを世界へ発信～SDGs 未来都市の取組」

「古民家の空き家再生・活用事例」現地視察

5月26日

「市民協働で推進する幸せのまちづくり・対話の実践」

講師：山口 覚 氏 (LOCAL&DESIGN(株)代表取締役。慶應義塾大学政策・特任教授)

### 3 研修報告

今回の研修では、福岡県福津市の津屋崎千軒の古民家再生と官民の取組、市民協働から得られる地域の活性化と空き家活用、その過程での取り組むべき課題を学んだ。

研修場所の福岡県福津市は、人口減少に悩む自治体が多い中、都市開発やベッドタウンとしての機能の影響から人口が増加しており、古からの街並みと新しい街並みが混在する地域である。人口増加の影響で学校が不足している状況も課題となっている自治体である。

まず、研修ではまちづくりにおける重要なポイントとして「小割にして地域を考えること」「人口を何のために増やすのか」「まちのブランディングの大事さ」があげられた。

また、「集いの場、対話の場をまち中に作る」ことも重要視していた。まちづくりを進めるうえで、住民同士や、官民合わせた話し合い「対話」をすることが重要であるとのことであった。

その背景として、現在の政策などが5年、10年でまるっきり変わることもありうるため、都度都度、しっかりと対話を行い記録していくことが重要とのことであった。

さらに、まちづくりを市民の声を交えて行うことにより、当事者意識が育つこと、自分のまちに「地元民がプライドを持てる」ようになることが挙げられた。この点においては、

貴重な古民家が民間売却された際に、地域で買い戻し運動がおこり 1口 25万円、3000万円を集め買い戻した事例が紹介された。

対話を行う上で重要視すべき点は、討論が苦手な人の声までいかに多く吸い上げる点であるとのこと。この点においては、現実問題として、まちづくりについて行政と自治会のみで話が進んでいることが多い課題も挙げられた。

このほか、課題解決のためには、各々の課題に対して請負人を割り当てる方式ではなく、かつてボーイング社が経営立て直しに用いたとされる立候補式にして取り組むことで、モチベーションが維持され、解決スピードが上がることも示された。

#### 4 研修成果と市政反映

○まちづくりと空き家問題の解決には市民力が必要

本市議会では、空き家条例を制定し空家問題に取り組んでいるが、抜本的な解決には至っていない。これには、個人の財産である空き家などを行政が簡単には片づけられない現行法上の壁がある。

一方で、空き家問題の解決を願う市民は多く、この中には所有者も含まれている。不動産の価値というのはそれぞれであるが、まちの歴史文化、街並み、住環境など、当事者同士で把握できるうちに対話を行い、その旗振り役として行政もともに取り組むことが重要であると感じた。

今回、研修地の福津市津屋崎では、古民家の街並みが残されていく半面、個人所有の物件は解体され、現代の住居に置き換わっている姿も見ることができた。これは、まちにとっては空き家にならず新陳代謝が進んでいる好事例にもとれるが、古民家を生かしながら街づくりを行うことで、景観や情緒あふれる街並みを維持することもできる。

こういった観点から、都市計画やデジタル田園都市国家構想、中山間地域振興計画などにおいても、市民対話をしっかり行い、その時の考えを整理しベクトルを合わせ、市民一体となって取り組んでいくことの重要性を改めて感じた。この点は、今後の様々な事業にも通じるため、ことあるごとに提言していきたい。

#### 5 感想

研修を終え、空き家問題の根深さを改めて感じた。本市の中心市街地にも見て取れるが、空き店舗を埋めながら回しても、「定着」や「波及」には中々つながらない。行政主導のまちづくりは、一定の成果もあるが、補助金をばらまくだけの事業となっていないか、新たに考えさせられた。市民の声を吸い上げ、市政に反映させるという当たり前で根本的な問題に、いま一度目を向け、市政発展につなげていかなければ、市政は市民の手にはなく、無関心や無興味、他人事のまちが作られていくような気がしてならない。

以上を踏まえ、今後も本市の空き家問題が抜本的に解決していくため、また、市民総動員の姿勢を構築していくため対話を重視し、各種調査研究を重ねていきたいと思う。



古民家再生された元民宿玉井での研修



津屋崎千軒 まち歩きと再生物件



個人から市に寄付され解体予定であった藍の家。民間団体が管理運営。年間数万人来家



対話の手法について、ワークショップや座学を行った

